「ほんのまくら 2017」解答リスト　～中央図書館～

No	本のまくら	本のタイトル	著者	出版社	分類
1	チョコレートから、人生のどのような記憶が蘇るだろうか。	チョコレートの世界史	武田尚子	中央公論新社	383.8
2	私は時々地球儀を廻しながら、東京を貫く緯度に沿って指先をすべらしてみる。	星の民俗学	野尻泡影	講談社	440.4
3	わたくしといふ現象は假定された有機交流電燈のひとつの青い照明です。	宮沢賢治詩集	宮沢賢治	岩波書店	911.56
4	幼い頃、初めてパンダの絵を見たときに「架空の動物」だと思ったことを覚えている。	いのちの王国	乃南アサ	文藝春秋	480.7
5	これで、この拙い稿を終ろうと思う。ここまで読み終えて下さってありがとう。	ぼくはマンガ家	手塚治虫	角川書店	726
6	日本人は、よくも悪くも働きすぎだと思う。	3日もあれば海外旅行	吉田友和	光文社	290.9
7	お母さんたちは、なんとまあみごとに聞きわけるものだと思います、男の眼から見ると。	声が生まれる	竹内敏晴	中央公論新社	804
8	EXILEと湘南乃風、Perfumeのニューアルバム。それがその日のチョイスだった。	風が吹けば	加藤実秋	文藝春秋	913.6
9	もう一つの名を多島海と呼ぶエーゲの海。	ギリシア神話を知っていますか	阿刀田高	新潮社	911
10	ニーチェは私の生涯の友である。それも半端なつき合いではない。	座右のニーチェ	齋藤孝	光文社	134.9
11	スペースシャトルが轟音とともに打ち上げられ、スピードを増すと徐々に体が重くなります。	宇宙からの贈りもの	毛利衛	岩波書店	538.9
12	永いあいだ、私は自分が生まれたときの光景を見たことがあると言い張っていた。	仮面の告白	三島由紀夫	新潮社	913.6
13	北風が鳴る、ごうごうと鳴る。風の音とコーラスをするように、ガラス戸が身を震わせる。	田園に暮す	鶴田静	文藝春秋	914.6
14	荒木公平の人生は一人生というのがおおげさであるならば会社人生は一、辞書に捧げられてきたと言っても過言ではない。	舟を編む	三浦しをん	光文社	913.6
15	うちの庭に野良猫がゐて段段おなかが大きくなると思つたら、どこかで子供を生んだらしい。	ノラや	内田百閒	中央公論社	914.6
16	モーツァルトの曲を聴くと頭が良くなるとか、牛の乳が良く出るといった話がテレビで話題になりました。	今のピアノでショパンは弾けない	髙木裕	日本経済新聞出版社	763.2
17	わたしは子どもの頃から絵を見ることが好きでした。	絵のある人生	安野光雅	岩波書店	720
18	今の社会では、「自分を表現する」といういことが随分と容易になったように思います。	耳を澄ませば世界は広がる	川畠成道	集英社	762.1
19	今日もアーティストからメールが届く。	キュレーション　知と感性を揺さぶる力	長谷川祐子	集英社	706.9

20	わたしたちは今、いったいどこにいるのか。	あなたは誰？私はここにいる	姜尚中	集英社	704
21	ジム・クィララランは記者クラブの食堂の椅子に肩を落としてすわりこんでいた。	猫は殺しをかぎつける	リリアン・J・ブラウン	早川書房	914.6
22	日本の夏といえばキンチョーであるが、日本の冬のショーチョーはというと、どこであろうか。	日本はじっこ自滅旅	鴨志田穣	講談社	291.09
23	毎日の生活の中で、なかなか「日本のものづくり」なんて考えることなどあまりないかもしれません。	モノの仕組みふしぎ雑学	中村智彦	永岡書店	504
24	祖父の通夜の席に、猫の面をつけたひとが座っているのかと思い、よくよく見るとそれは巨大な正真の猫である。	ひと粒の宇宙	石田衣良	角川書店	913.68
25	過去のある時代を舞台に創作されたミステリには、現代ミステリとは全く違った魅力があります。	死人に口無し	日本推理作家協会	徳間書店	913.68
26	江戸の人々が話し言葉を、どのように発音していたか、それは捉ええない。音声は記録されないからである。	江戸のおしゃべり	渡辺信一郎	平凡社	911.45
27	駅ビルの六階にある本屋、成風堂のフロアで、杏子は中年の女性客に呼び止められた。	配達あかずきん	大崎　梢	東京創元社	913.6
28	わたしはいまベナレスにいます。	氷菓	米澤穂信	角川書店	913.6
29	三つ年下の僕の弟は、人見知りが激しくてひどい引っ込み思案だった。	シアター！	有川浩	アスキー・メディアワークス	913.6
30	「今、悲鳴が聞こえなかったか？」	踊るジョーカー	北山猛邦	東京創元社	913.6
31	私って、いつまで私のまんまなんだろう。	対岸の彼女	角田光代	文藝春秋	913.6
32	ドアノブをつかむ。氷を握ったように冷たい。	八日目の蝉	角田光代	中央公論新社	913.6
33	「十五代続いた歴代の徳川将軍のなかで、抜群の業績を残した三人は誰か？」	家康の仕事術	徳川宋英	文藝春秋	291.1
34	今欧米では、「禅」がちょっとしたブームになっています。	禅の作法に学ぶ美しい働き方とゆたかな人生	枡野俊明	朝日新聞出版	188.8
35	見当外れな言いがかりをつける乗客を怒鳴りつけそうになり、それを必死で我慢しているうちに、やがてハンドルを握る私の手は、まるで痙攣でもしたように小刻みに震え始めるのだった。	東京タクシー運転手	矢貫隆	文藝春秋	685.5
36	私が初めて絵というものを意識したのが、何歳だったのか、今となってはぼんやりとしてわからない。	「モナ・リザ」に並んだ少年	茂木健一郎	小学館	723.3
37	「刀は武士の魂」という言葉がある。	日本刀　日本の技と美と魂	小笠原信夫	文藝春秋	756.6
38	姉さんは、知らないだろうけど。あの夜も、ちょうどこんな感じの雨が、降っていたんだよ。	インビジブルレイン	誉田哲也	光文社	913.6
39	「でも、思うんだ――。 たとえば、何かひどいことがあっても、 すごくひどいことがあっても、 だけどそれはまだ物語の途中って…。	ハルフウェイ	北川悦吏子	幻冬舎	913.6

40	「たい」ことが沢山ある。	人生は負けたほうが勝っている	山崎武也	幻冬舎	159
41	なみだはにんげんのつくることのできる 一ばん小さな海です	寺山修司少女詩集	寺山修司	角川書店	911.56
42	予感めいたものなど、何ひとつなかった。	秘密	東野圭吾	文藝春秋	913.6
43	なぜおまえは猫が好きなんだ、というふうに言われたら、存外こっちのひとりよがりで・・・	なぜ、猫とつきあうのか	吉本隆明	講談社	914.6
44	その川は、思い出せるかぎりもっとも古い記憶だ。	川は静かに流れ	ジョン・ハート	早川書房	933
45	人はときとして、九州人になる。	よくわからないねじ	宮沢章夫	新潮社	914.6
46	山々に春霞が薄く棚引き、満開の山桜がはらはらと花びらを舞い散らせている。	蜩の記	葉室麟	祥伝社	913.6
47	俺はきっとうまれそこなったんだ。	ほかならぬ人へ	白石一文	祥伝社	913.6
48	古代ギリシャの人々は、ハチを”働き者のうえ、幾何学を心得ている賢い生きもの”と考えていたそうです。	秋山仁のこんなところにも数学が！	秋山仁、松永清子	産経新聞出版	410.4
49	いきなりですが、あなたに質問です。あなたの会社の社長が次のようにボケてきたら、あなたはどうツッコミを入れますか？	最強のコミュニケーションツッコミ術	村瀬健	祥伝社	779.1
50	絵がうまくなるにはどうしたらいいのでしょう。	子どもに伝える美術解剖学	布施英利	筑摩書房	724
51	言葉はあるときは人を奮いたたせ、あるときは人を傷つける凶器となり、また疲れた心を優しく癒してくれる大きな力を持っています。	美しい日本語のすすめ	坂東眞理子	小学館	810.4
52	『百人一首』はクロスワードであり、暗号である。	百人一首の謎	織田正吉	講談社	911.14
53	人々が行き交う市場の雑踏の中で、若い男女が出逢った。	地図とあらすじでわかる！万葉集	坂本勝	青春出版社	911.12
54	鳥の落とし物から、時折見慣れぬ洋風の草も芽吹くが、元々は和風の庭だ。	家守綺譚	梨木香歩	新潮社	913.6
55	この本を私が自分の身の上話から書きだすのはうぬぼれのためではない。	古代への情熱	H. シュリーマン	角川書店	201
56	私は十二年前、ひとり暮らしを始めるにあたり、料理の本を百冊は読破した。	トラブルクッキング	群ようこ	集英社	914.6
57	「歴史は書きかえられる」という有名なことばには、大きく分けて二つの意味がある。	日本の歴史　1	井上光貞	中央公論新社	210.08
58	薄暗い部屋の中、たった三分間のフィルムが私に見せた世界は美しかった。	光待つ場所へ	辻村深月	講談社	913.6
59	みなさんは「ホルモー」という言葉をご存じか。	鴨川ホルモー	万城目学	角川書店	913.6

60	箱根駅伝は正式名称を「東京箱根間往復大学駅伝競走」という。	箱根駅伝　襷をつなぐドラマ	酒井政人	KADOKAWA	782.3
61	二〇一二年四月八日から一四日にかけて、私は、おそらく生涯忘れることができないであろう一週間を過ごすことになりました。	始める力	石田淳	幻冬舎	159
62	天から注ぐ西日がグラウンド一面にホースで撒いたような橙を広げている。	架空の球を追う	森絵都	文藝春秋	913.6
63	むかしむかし。 といっても、それほどむかしではないのである。	聖なる怠け者の冒険	森見登美彦	朝日新聞出版	913.6
64	その本を売りに出したのは、十八歳のときだった。	さがしもの	角田光代	新潮社	913.6
65	そう、このインタビューは新聞に載るんですのね。どんなお話をすればよろしいんですの？自由に、昔話を？それはまた、難しいお題ですこと。	ジヴェルニーの食卓	原田マハ	集英社	913.6
66	背筋をすっと伸ばした毅然として気品ある立ち姿。	猛女とよばれた淑女	斎藤由香	新潮社	289.1
67	過去に、ハシカと私についてのエッセイを書いたことがある。	わたしの普段着	吉村昭	新潮社	914.6
68	母さんの行方がわからなくなって一週間目だ。	母をお願い	申京淑	集英社	929.1
69	「相変わらず、青梅の辺りへお出ましなのですか」	伊賀の残光	青山文平	新潮社	913.6
70	僕以外の人ならこれで一冊、本を書けたにちがいない。	狭き門	ジッド	光文社	953
71	わたしは生涯に、たくさんの家を見てきた。	カシタンカ・ねむい	チェーホフ	岩波書店	983
72	「唐突だけどさ」 彼は言った。 「彼女を殺したの、あんたでしょ」	目白台サイドキック	太田忠司	角川書店	913.6
73	狭かった。学生時代は狭かった。 広いところに出たはずなのに、なんだかとても窮屈だった。	ブラザー・サン シスター・ムーン	恩田陸	河出書房新社	913.6
74	一流の経営者何人かと話していて、「どういう人を引き立てたいか」という話題になったことがあります。	強運を味方につける49の言葉	本田健	PHP研究所	159
75	性格は持って生まれたもので、変えられないと考える人がいる。	心をリセットしたいときに読む本	齋藤茂太	ぶんか社	159
76	幕末は〝第二の戦国時代〟といっていい。	坂本龍馬の人生訓	童門冬二	PHP研究所	289.1
77	あたしたち猫は、生まれた瞬間から人間を魅了する力を持っています。	猫と暮らせば	南里秀子	小学館	645.6
78	昭和三十九年十月十日、前日までの雨がウソのように晴れ、秋の陽が東京の国立競技場を照らした。	東京オリンピックへの遥かな道	波多野勝	草思社	780.69
79	あなたが小学校に入学する頃に、なりたかった職業はなんだっただろうか？	サッカー日本代表の少年時代	伯井寛 ほか	PHP研究所	783.47

80	その家を狙ったことに深い根拠はなかった。強いていえば、多少なりとも家の様子を知っていたことぐらいだ。	手紙	東野圭吾	文藝春秋	913.6
81	「完璧な文章などといったものは存在しない。完璧な絶望が存在しないようにね。」	風の歌を聴け	村上春樹	講談社	913.6
82	いま、未曽有の時代がはじまろうとしている。	下山の思想	五木寛之	幻冬舎	914.6
83	ある日、どこからともなく、こんなイメージがくっきり頭に浮かんだ。	幸運の25セント硬貨	S. キング	新潮社	933
84	日本の戦後憲法九条には幾つもの謎があります。	憲法の無意識	柄谷行人	岩波書店	323.1
85	北関東の小さな駅の中にある本屋は、『読みたい本が見つかる本屋』らしい。	金曜日の本屋さん	名取佐和子	角川春樹事務所	913.6
86	ぼくは時々、世界中の電話という電話は、みんな母親という女性たちのお膝の上かなんかにのっているのじゃないかと思うことがある。	赤頭巾ちゃん気をつけて	庄司薫	中央公論社	913.6
87	人間はどれくらい賢くなったのだろうか。	人間は考えても無駄である	土屋賢二	講談社	914.6
88	裏街の小さな居酒屋の、土間に置いたテーブルを囲んで、彼等はいつものように安い酒を飲みながら、三時間以上も議論をした。	青春の蹉跌	石川達三	新潮社	913.6
89	昭和二十年八月九日の夜十時半頃、はげしく私の官舎の入口をたたく音が聞えた。	流れる星は生きている	藤原てい	中央公論社	916.6
90	そんなにたくさんの写真を見てきたとはいえない私でも、忘れられない写真がある。	散歩写真のすすめ	樋口聡	文藝春秋	743
91	「サラリーマン」という和製英語はもともと1920年代に生まれたものだという。	サラリーマン漫画の戦後史	真実一郎	洋泉社	726.1
92	夢を実現するためには、その前にその夢を抱かなければならない。	月をめざした二人の科学者	的川泰宣	中央公論新社	538.9
93	非日常の扉を叩いて下さった読者の皆さん。	ライオンの飼い方キリンとの暮らし方	非日常研究会	新潮社	480.76
94	この紋所が目に入らぬか！	時代劇をみるのがおもしろくなる本	歴史のふしぎを探る会	扶桑社	210.04
95	日本は、世界が驚くものを持っています。	香と日本人	稲坂良弘	角川書店	792
96	「我々は、小人になったのか！」	スキップ	北村薫	新潮社	913.6
97	情けは人のためならずー昔の人は、そういった。	今夜は眠れない	宮部みゆき	角川書店	913.6
98	僕たちがとうとう自力救済に乗り出したのは六月半ばのことだった。	我らが隣人の犯罪	宮部みゆき	文藝春秋	913.6
99	飛行クラブの活動内容。 空を飛ぶことを目的とする。	少年少女飛行倶楽部	加納朋子	文藝春秋	913.6

100	人は年齢をとれば誰でも老人になることができるのか・・・・・・これが、この作品をつらぬく巨大な謎かけである。	老人の極意	村松友視	河出書房新社	914.6
101	白く凍った海の中に沈んでいくくじらを見たことがあるだろうか。	凍りのくじら	辻村深月	講談社	913.6
102	まっさらの鉛筆が一人に一本ずつ配られた。深緑色のHB。	その日のまえに	重松清	文藝春秋	913.6
103	次に生まれてくるときはプラナリアに。酒の席での馬鹿話で私が何気なくそう言ったら、意外にもみんなは興味深そうにこちらを見た。	プラナリア	山本文緒	文藝春秋	913.6
104	日本将棋連盟に所属する棋士は約160名いますが、棋士という職業の場合、決まった日課というものはありません。	捨てる力	羽生善治	PHP研究所	796
105	「味覚人飛行物体」	缶詰に愛をこめて	小泉武夫	朝日新聞出版	596
106	「そもそものはじめは紺の絣かな」とうたった詩人がいて、私はこの句にひどく感心した。	ブリューゲルへの旅	中野孝次	文藝春秋	723.35
107	いま、日本語が揺れ動いています。	使ってみたい落語のことば	長井好弘	中央公論新社	779.13
108	私は深夜に起こされた。	長い長い殺人	宮部みゆき	光文社	913.6
109	その店に足を踏み入れた途端、目眩にも似た奇妙な感覚に襲われた。	二十四時間	乃南アサ	新潮社	913.6
110	かなりお酒を飲んで、気がつくと自宅の玄関で寝ていた、という経験はありませんか。	記憶がなくなるまで飲んでも、なぜ家にたどり着けるのか？	川島隆太、泰羅雅登	新潮社	491.37
111	人間は、先史時代から、黄金の夢に取り憑かれてきた。	黄金の世界史	増田義郎	講談社	204
112	武士階級は、上士・中士・下士の三者に分けることができる。	武士たちの作法	中村彰彦	光文社	210.47
113	今、世代を超えて言葉による自己表現をしたい人が増えています。	ぼくらの言葉塾	ねじめ正一	岩波書店	810
114	ロンドンで暮らしていたとき、配管工には何度電話をかけたかわからない。	トラベルチップス	高橋大輔	秋田魁新報社	290.9
115	×月×日　六時半に目が覚めた。	役にたたない日々	佐野洋子	朝日新聞出版	914.6
116	蔀の隙間から射し込む陽が、狭い寝間を心地よく温めている。	泣くな道真	澤田瞳子	集英社	913.6
117	ジェイマス五世公の摂政、マンガン・ティーゲが息をひきとったとき、徳と教養にあふれた人物を失った悲しみのさなかで、だれも猫には気づかなかった。	だれも猫には気づかない	アン・マキャフリー	東京創元社	933
118	ミセス・プレストンはいつもの心配そうな顔で、アンナの帽子をまっすぐに直した。	思い出のマーニー	ジョーン・G・ロビンソン	KADOKAWA	933
119	リフトは快調に上昇を続けていた。	ぼくの、マシン	大森望／編	東京創元社	916.8

120	部屋の中は七時をすぎていてまだ電灯はつけていない、そんな位の薄暗さである。	記憶の絵	森茉莉	筑摩書房	914.6
121	オーク材のドアを開けたとたん、真一は居心地の悪さを感じた。	百年の恋	篠田節子	集英社	913.6
122	一九九一年七月十四日、日曜日　それはいつもそこにあって、外に出ようとしている。	ぼくのプレミア・ライフ	ニック・ホーンビィ	新潮社	933
123	兜は、男が倒れるところを想像した。	ほっこりミステリー	伊坂幸太郎 ほか	宝島社	916.8
124	世の中には、真面目な顔をして話題にすると、どうにもこうにもけむたがられてしまう問いというものがあるようだ。	青いバラ	最相葉月	新潮社	916
125	窓から射し込む月の光は、本が読めるのではないかと思えるほど眩かった。	玉蘭	桐野夏生	文藝春秋	913.6
126	一九九五年、東京都国分寺市で、古代の道路跡が長さ約三四〇メートルにわたり、発掘された。	古代道路の謎	近江俊秀	祥伝社	682.1
127	「急がば回れ」というありがたい言葉が誕生した歴史的な場所がある。	地団駄は島根で踏め	わぐりたかし	光文社	812
128	徳川家康は天正七年、三十八歳の時に、織田信長の命令によって最初の妻・築山殿を殺害、二十一歳の長男・信康を切腹させている。	江戸の子育て	中江和恵	文藝春秋	379.9
129	現代の文明社会では、一日に三回食事をすることに誰も何の疑問も感じていない。	日本人のひるめし	酒井伸雄	中央公論新社	383.8
130	切手を買う。速達を出す。貯金を引き出す。	郵便局を訪ねて1万局	佐滝剛弘	光文社	693.3
131	顔とは不思議なものである。	顔を考える	大塚信一	集英社	469.43
132	私たち親子三人は、一九七一年春から七三年春までの二年間、西ドイツのミュンヘン市に暮らす機会をえた。	ミュンヘンの小学生	子安美知子	中央公論社	372.34
133	バードウォッチャーと呼ばれる人たちがいます。	身近な鳥の生活図鑑	三上修	筑摩書房	488.1
134	ルネサンスという言葉の意味や、次期についてはさまざまな視点から色々な解釈や見方がある。	ガリレオの求職活動　ニュートンの家計簿	佐藤満彦	中央公論新社	402
135	子供たちは、庭で遊んでいる。	ある青春	パトリック・モディアノ	白水社	953
136	映画監督は、映画を語るべきではない。	凡人として生きるということ	押井守	幻冬舎	914.6
137	パンダといえば、動物園で見るものと思う人がほとんどだろう。	パンダ外交	家永真幸	メディアファクトリー	489.57
138	テレビゲームの世界は、もうじゅうぶん複雑に発達してしまっている。	ポケットの中の野生	中沢新一	新潮社	797.9
139	幼いころ私の家や日常生活には、日本を思わせるようなものはほとんどなかった。	日本との出会い	ドナルド・キーン	中央公論社	934.7

140	北極海からまともに吹きつける風は、もう気が狂ったかのようだった。	アラスカ　永遠なる生命	星野道夫	小学館	295.39
141	中国の鉄道に乗るのは、はじめてである。	中国火車旅行	宮脇俊三	角川書店	292.2
142	忍者の話をしたい。	歴史の愉しみ方	磯田道史	中央公論新社	210.04
143	たくさんの時間と労力を費やして築き上げた経験を、今後にどのように活かしたらよいでしょうか。	40歳からの適応力	羽生善治	扶桑社	796
144	お茶をいただく。	茶の湯の不思議	小堀宗実	日本放送出版協会	791
145	狂言をやっているのはいったい誰？	世にもおもしろい狂言	茂山千三郎	集英社	773.9
146	レナード・バーンスタインがオーケストラに向かって、ブラームスの「交響曲第一番」の指揮を始めた。	棒を振る人生	佐渡裕	PHP研究所	762.1
147	「東京から自然が失われた」といわれるようになって久しい。	東京　消える生き物　増える生き物	川上洋一	メディアファクトリー	482.13
148	地下鉄・新御街町の駅の脇、下町風情が漂う大通りに面して、そのレストランはあった。	給食の味はなぜ懐かしいのか？	山下柚美	中央公論新社	141.2
149	南極観測隊の一年ごとの交代は、ヘリコプターで行われる。	面白南極料理人	西村淳	新潮社	297.9
150	ソラマメがたくさん店頭に並び始めた。	こぐれひでこのおいしいスケッチ	こぐれひでこ	新潮社	596
151	いよいよ青首が北の国から戻ってきました。	これがC級グルメのありったけ	小泉武夫	新潮社	596.04
152	来客の多いわが家で、あまたの客人から羨望のまなざしを一身に集めているものがある。	平松洋子の台所	平松洋子	新潮社	596.04
153	船べりの手すりにひじをついて、ひとりの若者がうつろな眼でしだいに遠ざかって行くベルギーの陸影をながめていた。	オリエント・エクスプレス物語	ジャン・デ・カール	中央公論社	686.23
154	はじめてトルコ共和国の土を踏んだのは、確か一九七〇年の秋のことである。	トルコのもう一つの顔	小島剛一	中央公論社	292.6
155	「イタリアはよかったけれど、イタリア人ときたら・・・・・」	グランドツアー	岡田温司	岩波書店	293.7
156	わたしたちはいつも、時間というものを意識しています。	1秒って誰が決めるの？	安田正美	筑摩書房	421
157	テレビの通信販売は、健康食品、健康グッズをたくさん宣伝しています。世の中は、健康ブーム。	時そばの客は理系だった	柳谷晃	幻冬舎	410.4
158	科学の歴史は一進一退の繰り返しだ。	巨大翼竜は飛べたのか	佐藤克文	平凡社	481.78
159	少し前、こんなことを考えていた。夏になると聞こえてくる蟬の声。蟬は実は〈土の精〉ではなかろうか。	動物に魂はあるのか	金森修	中央公論新社	481

160	「万物は流転する」と言ったのは古代ギリシャの哲学者・ヘラクレイトスである。	寿命はどこまで延ばせるか？	池田清彦	PHP研究所	461.1
161	東京の谷間を歩き廻っている。	東京スリバチ地形入門	皆川典久＋東京スリバチ学会	イースト・プレス	454.91
162	かつて夜空に輝く星ぼしは不変のものと信じられてきました。	オリオン座はすでに消えている？	縣秀彦	小学館	443.5
163	ふつう飲み屋という。「飲み屋に寄っていく」と、こんなぐあいだ。	今夜もひとり居酒屋	池内紀	中央公論新社	914.6
164	「おいしい」を伝えようとして、何の疑問もなく、ごく当たり前のようにして使われている表現があります。	言葉にして伝える技術	田崎真也	祥伝社	596.04
165	トルコ蜜飴という菓子の名前を初めて知ったのは、ケストナーの『点子ちゃんとアントン』という小説である。	米原万里ベストエッセイ　I	米原万里	KADOKAWA	914.6
166	ローマの古典を読んでいると、飲食の場面にしばしば出会う。	シーザーの晩餐	塚田孝雄	朝日新聞社	383.8
167	お稲荷さんといえば誰でもキツネをイメージするでしょう。	神様になった動物たち	戸部民夫	大和書房	387
168	何年使いつづけてきたか忘れるほど、長く使ってきたお椀だが、少し大きいと感じるようになった。	手もちの時間	青木玉	講談社	914.6
169	掃いたり拭いたりのしかたを私は父から習った。	幸田家のしつけ	橋本敏男	平凡社	910.268
170	「日本最古のものを片っ端から調べてみよう」	ニッポン最古巡礼	高田京子、清澤謙一	新潮社	523.1
171	日本はいかにして生まれたのか？	日本の「神話」と「古代史」がよくわかる本	日本博学倶楽部	PHP研究所	210.3
172	南海先生は生まれついての大酒飲み。	三酔人経綸問答	中江兆民	光文社	311.21
173	わたしは、はなはだ楽天的な人間に見えるらしいが、案外取り越し苦労をするほうである。	生きること思うこと	三浦綾子	新潮社	190.4
174	以前、ロシアのサンクト・ペテルブルグを訪れたとき、アンナ・アフマートヴァという詩人の自宅を見学する機会があった。	神の発見	五木寛之	角川書店	190.4
175	ときは戦国、嵐の時代。	戦国武将の意外なウラ事情	日本博学倶楽部	PHP研究所	210.47
176	自分には自分に与えられた道がある。	道をひらく	松下幸之助	PHP研究所	159
177	今年の三月まで二年間、関西の小さな女子大学の学長をつとめていました。	木のことば　森のことば	高田宏	筑摩書房	650
178	今から五〇〇年あまり前の一四九二年、コロンブス一行は大西洋を横断し、待望のインディアスに到着した。	トウガラシの世界史	山本紀夫	中央公論新社	619.91
179	思い出してほしい。あなたが最近ー最後に入ったコンビニ。そこで、何を買いました？	キミがこの本を買ったワケ	指南役	扶桑社	675.2

180	もしあなたが男性だった場合、これから愛の告白をするために人気のレストランでお目当ての女性と特別なディナーをしている場面を想像してみてください。	ディズニーの魔法のおそうじ	我孫子薫	小学館	689.5
181	大四郎は一日のうち少なくとも二度は母の部屋へはいってゆく、「お母さんなにかありませんか」と、云うことは定っている。	大炊介始末　収録 ひやめし物語	山本周五郎	新潮社	913.6
182	こちらに背を向け、茶を点じているそのひとの、つややかな垂れ髪を分けて見える耳朶は、春の陽ざしに濡れた桃の花片のようだった。	真田騒動　恩田木工	池波正太郎	新潮社	913.6
183	『枕草子』から、ちょっと毒のあるほうが人生はうまくいく、という人生観を読み取るのは、少し意外なことかもしれない。	ちょっと毒のあるほうが、人生うまくいく！	清水清範	三笠書房	914.3
184	新幹線に乗って東京から博多まで移動すれば、十億分の1秒後の世界に到着できる。	トワイライト・ミュージアム	初野晴	講談社	913.6
185	本書の目的は、人間の基本単位を考え直すことである。	私とは何か	平野啓一郎	講談社	914.6
186	その会社はつぶれかかっていた。	カレーライスの唄	阿川弘之	筑摩書房	914.6
187	「アンビリーバブル・・・・・・」	勝ち続ける意志力	梅原大吾	小学館	798
188	国鉄も朝の満員電車は酷鉄であり、高速道路は止まることもできない拘束道路である。	ジョークの哲学	加藤尚武	講談社	901.7
189	死刑はやむを得ないが、私としては、君には出来るだけ長く生きていてもらいたい。	裁判官の爆笑お言葉集	長嶺超輝	幻冬舎	327.04
190	経験するというのは事実其儘に知るの意である。	善の研究	西田幾多郎	岩波書店	121.6